家上物語　六孝

K
2
モ
6

山形県立図書館
66108
山形県立図書館蔵書

最上義光物語巻之上　目録

一　上杉家へ使者来事
一　義光公息女京都にて害せらるゝ事
一　家康公御父子会津へ進発之事
一　上国へ往々山形口へ働之事

新聞記念山形縣立圖書館藏書

K289 NO 6

一 行者か使之者可有之事

右聞者なるき家之者なる面沼家

帰らぬ様ニとくとくき申くまく

今度中間之気遣有之者可為之

事なれハ其場ニて相立申しく候

国へ往大分之蔵しにおへくし

さて山形にて使ともかくとりけれ
は最上出羽は大によろこひ給ひ
内府公家康へ注進ありしかは家康公
は出羽の武士ともを集めけり頼もし
まつり事を新たにとゝのへ給ひけれ
しれは関東近衛の兵とも出羽
せしむよつて最上義光は中川使者

と名乗て嫡子の駿河守義康を
在江戸させける猶最上山形の太守
直江兼続尾張守甲斐中納言浅野
鎌倉の三村伊予守伊勢守宇喜多殿
直江入道て外様宗徒の人をとゝ集め
何事もみな出羽は田中殿家
しかるに上杉家より使者をさしつかはし

よく〳〵見さためけれは大にはく
ましくは御せいのかれし京極の一とことしが
いとく御所の御行幸と祈しく私の
恩恨をまいらく事と思ひてよりせく
天下の如と川上の衛に入けの様
かしく舎し候はとくと物見ともにしか
御所の京の御きとうけ申すす願ふくる

ことのわりかりけるかことなりとも廉なるに
諸しきりのおおきはれにいつへつつ
後もよ切の御候しくも候本の
使人の前を切すらやうり寸ゑを侍
されく京極道俊の作りくとかく
らされく人れとくしける所なく
よりわか鎌延卿あき民部候る

とりなきがゆゑもなく十郎殿とこそたれ
に留く思しめされずして追て思
案を廻しけるにも数代武家の
御前にしてきも宝の上の大名し
御前に歌対せんと相伴くは
言しつのめでたきとそくの器
のまさかにとて当るべしとやいふ候

継ときしりぬれとのまつにひらゝぎ
たゞくく金銀をうけおもれし
あるべしかるまくゆるかりけるにあく
小縁おはしけるにぞ子にてこそ給
利あらんやうに妙なるを当れる
ませしはいそき斬るを明所へ
通とてゆきたるに京給さずなく

当寺へ宗光とさし向ひてはなし光
よし山も若き時雅楽の秘事とて免され
不審の事共おのづから秘事ならんとし聞申
へきりつくまじしきせ一銭ほし
かりし也郷し中時望しすりくいら
頭も計兼て一ちはしはしてまつりて遣
のりし也よふ一ちまて極めてもりけれハ

義光すこし先一夜しらしく此処
にてありけれハ家綱合の使ありと云
出しが義光も近よりし京しより御翻心
まなる事ありせし所此時まつる方
事の子今宵一てしとし下まてかくされ
けるにしばし康父も供見てしはし逢
かりしが義光の使いもとをもりてく

よ経業の系脈沢保とくりしめくめくなれ
かはり行任しりけれ何もなしやく出現
と命しれこの秘ことなと承保白すはへ
一さうしにて住とふかよたいれりる上経統
相の候進上候の俗殿御をそ香山貴い
まかりける宗家家なり 此仰ことしく
関白氏長者に
よ有く…かえ 大樹のこと聞し 菊光公ち候家へこうふこ

あるき子細のこととし大閤を光
公より人に女の女何り仰す要藤公
年れ小く信輔なかくさうけかく年
すゑにつのまゐを関白秀次公に
つかり世のかをれらりにへ世上脈
よ方へ迄りあてそれりるに植ちく
兵部の池の勤身候うそ也のまいく

右の国あ(ま)へけり給へ給へ鈍へて
こそくて御切腹ありしかば秀次公の妻
は三十余人ともに三條河原にて殺害
しける其中に義光公の息女も十五にて
ましましけるがいまだ義光公とも
京へのぼりしかば時ならねど一所のうちなど
御前にしはしてましましてへいそぎ御位に

伝へられけり御弟にて御聞しなり
しかれども右浦石見守とて申ける
秀次公の妻妾ともに三十余人何とて誅せ
られけるぞと姫君御内ありしと
聞りけりまことに新人にて候ぞれ
但其御姫の宮様の御辞世の御歌
くされけるかくこそはよしと泉木

のゆりけれども業田豊かりしく出来
とありぬきも白し銀しものぼろし
向くはせたまりけれ使にまかりなり
今はこれにこし來幼少の子ども中
なれども下すけ女房にかのあらせて
しかりけれども女を富とさえて是
のありけるが使さへいとなりぬるにもや

夜もすがら飛びあるこゝへやまだ
のこしかたまゐりし事にあらずなれば
御まへ姫君孫のまへの法事に送
せられけるが御宮様へ辞めんとせられけん
まゐりしにまうしされども二代ある
れいまさの姫君と新人たちの中に
させ何しもなきつきや御なるとうん会

ろしきありさまにて前とおもひしを
十文字に掻切て所をも去らずの仕
うたれし宰相殿は行の事とも
くおもはれてさかりければ御へいる
もとかんじおぼしけりとこと思わかと
姫君の御守刀を持給ひしきわめ
わしく思ひて切てのをゆるしと云

まつりける武蔵のかみも底とぞ申ける
こらへずして在原の中将を討給ひた
一命を捨てて人の嘲弄を受まじ
しかしながら家のためにと思
りければ浦の者にも御
もちたまふれども宰相殿へ
しく浦ありしきはなかりける御

じゝ美しくしとりはなれて空しく
鶉なりなむとよみしかしきのまに侍従
如此さもあるへき事にあらまほしき事
とゝめおかれて小侍従のよしかたるまゝに来
とく小式部内侍の歌を人にしられて歌よく
う大たらし女房にこそ御けしき立たまひけ
定頼の袖をひかへしくよミて月びん

もとむる事にこゝろを合せてむかしおもし
ろきことを眼といふしきさまとかくして
世にあらしと思ひさりて何となくやみにし
名門文右閑しけれは彼のむかしと居る
了寄ることもおほくありけれはをかしく
官閑のうちより中より従一位に至れる人
ありて栄花にてありけるにこそよろしく

を辞して子息秀次公へ関白をゆつり
其身は隠居して太閤と号せられ
しかるに隠居の後に秀頼公誕
生ありしかは秀吉公には讒者の申條
あやしけに思召[illegible]讒言[illegible]
ひそかにも萬端の事[illegible]遠ざけらるゝ[illegible]
て[illegible]高野へ[illegible]作[illegible]れ[illegible]

かくてこそありしかと秀次公申し
すまゐのひさしき始終[illegible]わかれあ
穏かなる事[illegible]の例[illegible]
いそかしき遁世[illegible]侍人
ともなひ謀[illegible]文[illegible]
縁切[illegible]秀次公[illegible]勘気
ところ[illegible]切腹[illegible]

伊勢かゝりの末ながくはすゞか
如きなくあはれ多く人おもしろき
もとは古国偏古のたてとし得作ある
く東国よりうちむすべるとぞ大内名
貫之百首の花月なくて集められ撰
ことどれし人々とは千代人玉の
まじれ帰の比のうちに今緑とやり

だ死なくをとはくせし玉枝のこさあそ
務はほしく月に水しろしあるらむ
さ岸花にうつり白れうけたゞに
みなみぞうしに一盤一裏附れ
すゞめあやなきけるくもいはゆせき
猫れ車にある人にうれるとやう
なるまへいつるしさよしく極はき

歳せいやしなひ女にいつくしまるすぐ
おこぶじと申させねたりけるとき
兄弟三人の御出生とまうけ給ふは
姉は太郎二上仙の代丸日母は尾張
住人日根やさかやきの娘のこゝろくしこき
桂石丸は文山白松雲の娘の腹にて御誕生
那津智丸かかしくは又右衛門十九歳

小野別当杉梅院の娘のたくいなり
られ人きらくもは羅所深くおぼし
しりけでまろくも髪と落しまゐ
白川のあるじ給ひし寺へまゐらし
まいら比山へよらせしまゐらしかりしかや
さらに人の女帯くさよれも京紙
りめぐり一條二条と川らけ草紙

あはれなるかな三條の橋へ出て柳を
こゝろしかくしおくまじき修良を石
田舎の物狂ひ神の名を境田加恵村も御なり
構より西北古人ならびに光華を
盛く並称くり此へ多くども上りければ
まづ若君達と害しまいらせんとおもはれ
を親見に房京所へなくまいれとこそ思

君をとは事ゆへいつき嘆（おう）しまり
父母は首のゝせまいれば仙の代君も
むなしく御身しくてこそいふ何かゝせ
まつり事ごやしてはしきりよふ人
としのがぐ母上逢をとりにあそばさせ
半殺の氏花も後の武士たちこれぞ
いかるまゝぐあそびにくれなく家様継

兄ぞ生害なさんとうけ給はりし
きゝてあさましくおもひ給ひければ
ころすまじくてゆるし給はれなどに
言ひしかば御兄弟二刀にさし通しまれ
を母は遂に人目もはゞからずおもはれくと
むなしくなりにける害せぬこそ悲しき
御兄弟はつゞきまゐらせて御使よびのまへ

御身んやけゆへ死なる身となりにけ
りけるも此世にとりしかば一別してし
はれのすゝめにしたがひ急ぎ別れ候て
あふぎ給ひし御母の居所へ参上してかく
害しぬるところのかたきの宿をたづね給ふ
子ゝ御兄弟とおげつげけり上に嫁
と筋をさへ高き嫁としてつげけるかや

霊仙のかみを誅せさせ給ふよしみ
こゝろにもかくまくほしくいひけれ
事いふにつけても御気色しれかたく
と思えとも世人しのいふくはかりと
おのれも知しるへきや霊らる怪
せさせたまふ所もあるなれはまてりし
あまた人一命をすて御前にさらしける

みなまても恥辱とあらへのきるぬき
かしきよとこゝかれぬる者なさ
ぬきたりまいらせあらんとたかみける
しかや家光なきかゝるらんきてとゆ
せまりしくはかうしるの頃御出のなし
形をさはこの稀しいふやにある稀なく
何りのなく出形なく身地風にとひける

ほとなく思しく姫君おはしけれは信長
ともしくものゝひとりもなかりけりや　一族にて光公（？）

もと一つより出て信長の何事も念にかけ
信長よりも家中一同におゐて信長に仕へ
奉りて御出世なされけるに信長公にも
信長におゐても別而御心安くおほしめし

家康公せいいとして元年光公大河
にをもしき時所に出ける事なくは
しきりに志村にてありける

信長公へ頼まれし所に家康公御出陣
おほしめされける所に別而御感
也秀吉光公ほと御心よりこそはかりなく
なしける君光年天正十九年辛卯十
月奥州九戸へ関白秀次公御出陣
なされけれは家康公にも御出陣なされけれは
御きゝとゝきて光公二万余騎にて

さればひで衡がはしめしてありける
国の内の者ども入道がかしこに候し
判官殿を御かくまひ申させ給ひさ
かしこくもたのまれ御前にたのまれ候
ぬるまで泰衡は頼朝にしたがひて
平泉の御所へ寄せて一国のうち
衣川の館にて判官殿をうちたてまつり

ことすくなくもはや家来一家
入りける白旗河をわたり越せさ
めされ候へ共はや世もこじめ会
ればせ合津へ御一族とも
ことすくなく都へ近くちかく
とされけるとかや
泰衡御父子三人ともに追討せら

ゑちこ山形の先御つゞき大坂へ
御とも有保科ゑちご守近江守
じんきうじ家康公御しだし給ひ
御遺言保科へ出るにより
進被仰出しく世の中年々御年十
可被仰渡候ひとつく御見に
一族道義あれともに清廟へ御参詣

大るゝ人内最後次にも御の出付け申しけ
此御事松平の家氏をたのみ中仁官
物らく江戸にいりまして江戸お城に
へもちのみな御老中まで御出
作法にれは老中衆にも御掃除しあけ
はよりなのかまつしまつて御番廣間
ほりあけにして江戸お城ともに御ものなどく

其剣山のうちにをさめまつられ氷室
の社と申すは神代の昔天照太神宮より御宝
人皇四十代天武天皇の御時迄をはしまされ
りけるに草薙の剣熱田へうつし給ひける
に神代の御宝はつたはれり一とせ一同
人皇七十二代白河院の御宇に誠の氷室と申
内一りしと思ひしに人皇宣旨にて

しかるを天智天皇の御時藤原の鎌足に封
しまゐらせられし所なりと聞へし御
きんや其後大織冠と申す大臣藤原の氏を給
し藤原氏の長者として御子孫は代々
其命をうけたまはりしに終に丹波
氷室の表に立置かれ其外に氷室と
公家の御伝へには宝剣の進めまゐらせ給ふよし

に一味しける事ありし大坂にかゝる名
田ら於法叔とゝろく関西の法
大名しあらす一休つゝし脈ゆうこし
今宵の陣へ於かゝりけり関より〇の与る
すりたる院京へくし於遺と挑
かくしく小かゝりけるとしりたらく
金沢寄つて仏庵寺あら宗寂と申将

鞍先にかゝへおこしけるに結城秀
康公を小山に御座まし下野庄余
父子のとき上方より出陣あるを伏見より先に
ほろしく九月八日小山を出立して日暮
浅野父子一同に江戸へ着きて後清洲
関ヶ原一戦のことゝ関東諸大名
いそかしけれ共此人〻を

と思ふと詠しものこ
然るに此上山形の城にて
家康公武州江戸よりかしこまりゐ
けふそちかけすゝめ山形へ見えしけれは
義光公悦ひせられけるつゝしく彦念
は春の頃若衆見ゆることゝもなく
出しよつ延ふ行わきをとゝめていとも御将

御焼しく山形表へ池兼りける
はやるありけるへ河のしく川さけ
然儀より将山形へ池兼かゝりしも
勇新作陣ありて林田原ニ所代
まん前守陣所より陣中ありける
武番将多陣世所江戸原将ニ旗
氏番将赤尾孫作所ニ番原将ニ旗

序者八孫将済還津刑部右孫将與歌
孫伊勢は孫将忠たゞしま孫将済あきら
朝に守るは節用将どもあまりける
たゞ人にて亡兼先家の宮河の上総
ね此度は儀に遠へ造り傳て伊川にて遠
遠なしりあるの説共文により[てゝ]よ
事ありし則光公てはあなりてゝ童

判たりし先生の説を文に記す〔小字：此説文今代宮中家／にもありし云〕中将家
光公宮ひりあたし并寄日しはへなし
哥もうしくれ言しく枕不申さこ
人々ゆめしむ容易うはりうらありん
書あびそつはらく哥語とさりし秋
さ聞なくさまありびありしくれ言不言は
一はへ々由し并寄日つ下子集時堂

義康は大将として東山道を責上り其年
とほく先手勢を出して服部もく近
く大に近江ゆくみへ遅くとおなじ
ながら陣どりしてあらん此所に
おそくかけりけれど名もなく聞く
東軍信州の境にはまづ先くるしみた
はとしれど家を遠く義康をつかはす

那州をへ越さしてたるにし急てく上京
ゆくゆく石田家勢此間に伝わりとく
あくく大兵をひとしく先しく関西
より大将河へいでよせて一体して供ん
の境を信度しをる居自由へ下おもし
大津の陣へ出でたりけるよし 義信は
おそくきたれど義康も御父子もとも

ば心抱を山よりいでしはじめ家をさ
らし花つみおのる穂の歯を抜くこと
言はりけり心経ゆ法のたくわへ
ろきおもく西方しけるをうしなう
国にこふりし花ぞ明月に大なる一揆
なりしみ彩の神きのうちもあらざれど
長柄の道の国中の静謐に名残

中にうつしめ経のかの西にして事花
もとりあへぞ和光は一たちしおく
手程をしく法ととへなる明星経とり
よる自らの花の灌頂法の本所
秀経里見録に安年書して
いうき光人もしきつにせ法の響
がたくも方み祝みのかれつき世なく思

みやけりせし須臾へ皆々河をたる
やらんかしるみ河よ盧智をしかなも
羅刹のまもりかくかざりけり振舞ける
ば我御し壽経にゆゑし且てま唐の廣き對
しまり世よのあなゐてのさへしむ進
うけく百鬼てしあへせとぞいかざる
すかわくきあら西ちり討罪しけと

とかりけじりあ光をつもしく黒雲たく
なくかりかよせ鎧あれくあくぞたと
いでなる事ゆくなりありて後ぞて
りまづ討けれのことにわり部しく大唐
のはあるとあ国くいぞてかくる不縁る
西しさ上方れ会戦大唐くはけ勝利
あるしきしさ祝ぐしく旅ゆくかん

あるじ先石田の保将とよみとるに
ゆかの将将とおもくてかへとかんぜ
一旦は将とさしかまことへけれ姫様
の勝利あるべきまさか縁あれば将道願
ふるとは将のくおもふも明らかなること
おめでたく悪しくつき行ふもよど
御ふさ一筋の弥広の仏ふくと

申給ふであるならば法将が縁をみ
もしあらば面しまへ自とのころ
さしに遣もんで一身が覚悟をして
なのうちにあらかぶる西かくならぬをたる
の安れかりけるにあらざればまくらの恋
あくまで筆ぎかしく折とみしまし
りきだいかに四海波にかつく覧

羽前山形 八日町 [illegible]書店

まゐりけりく無事にてやすく平
かなることをよろこひて都へ帰洛
て過もしけり

66108

寛[illegible]光把浦書之[illegible] 欤

山形県立図書館
1-0324815-3